



月刊部員新聞

2011年11月 第68号

編集・発行 Unit

スポーツとセンシングデータ

11月28日に「スポーツと知的創造」というタイトルでシンポジウムが行われましたので、それに参加してきました。

アスリートは誰

まずは「センシングM/G(ワーキンググループ)発足の背景や課題」ということで、プレゼンテーションから始まりました。

データとITを活用した練習モデルを、現在の社会の動きやこのM/Gの方向性などと絡めて創造していくという内容でした。

アスリートの持つ身体的、文化的、教育的、社会的、経済的、外向的のそれぞれの価値を、青少年に還元する一つの取り組みと位置づけだそう

です。ここでいうアスリートというものが誰を指しているのかが非常に気になりました。

いったい誰をイメージしてアスリートとしているのでしょうか。トップレベル以外にもアスリートとして考えているのでしょうか。

スポーツ界からの参加

次にスポーツ界からパネラーとして参加していた、陸上の朝原氏、ソフトボールの宇津木氏、バレーボールの柳本氏が15分ほどで自分とスポーツとの関わりを講演しました。

朝原氏はアンダーハンドパスにおける日本チームのバトンパス練習

におけるビデオの活用や、自身のスタートにおける自己感覚とタイムとの違いなど、競技者の視点からデータを活用するということをわかりやすく講演していました。

その後法政大学の渡辺氏が以前に行った実験データや、FC東

京バレーボールチームの伊奈氏が中学生で行った実証データの発表がありました。

伊奈氏の実験は

実際に開発された3cm四方ぐらいの無線式加速度センサーを手の甲や腰につけ、アタックをしたときに初心者と経験者でどのようにデータに違いが表れるかというものでした。

このあたりがこのセンシングM/Gで目指したい方向なのではないか、という感想も感じながら発表を聞いていました。

参加して思ったこと

このM/Gで行おうとしていることは技術の数値化です。果たしてそれは可能なのでしょうか。

まずは基準となる技術を数値化することから始まると思います。その技術は正解なのでしょうか。

朝原氏も講演の中で女子短距離の福島氏の腕の振り为例に出して、正しい動きが必ずしも正解ではないということをいわれていました。

もちろん一般的な技術というものはあると思いますが、それができたとして、その分析データを個人の能力と組み合わせで無限にあるどの方向に導くのか。そのソフトを構築することが非常に難しいのではないかと思

います。もちろんデータ蓄積によって、技術の問題点と解決法が一つの指標として導き出されるのようになれば、それは非常にすばらしいことだと思います。

分析だけでは勝てない

もしみんなが同じ技術を持つようになつたら勝敗はどこで決まるのでしょうか。

データが蓄積されればされる

ほど、誰でもある程度の指導ができるようになる、競技者もある程度のレベルには誰でもなれるようになるでしょう。

そこから他人に差をつけ、勝利をもぎ取るためにはもしかすると今よりも大変なことかもしれない。

コーチの重要性は今よりも大きくなるのではないのでしょうか。

それは我々にとっても同じ事です。

結局最後に頼りになるのは人間ということですね。

Unit代表 澤野 博(さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部員となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。NSCA CSCS、JADA DCOなども保有。

ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。

0422-34-5055(Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com